

教育ソフトウェア社のシステムを利用した学生による前期の授業評価を 5 月 7 日～7 月 31 日までに実施した。今年度より実習科目についても授業評価を実施することとなった。前期授業評価科目は教養教育科目 20 科目、看護専門科目 30 科目の合計 50 科目（内実習科目 2 科目含む）であった。

講義・演習の授業評価項目は、計 10 項目と 2 項の自由記載で構成されていた。1.授業については、講義の方法や内容について問う 5 項目、2.授業に対する自身の取り組みについては、科目の目的目標を理解し、主体的に学習に取り組めたかについて問う 5 項目で構成した。3.科目を受講し向上した・影響を受けたディプロマポリシー（DP）を回答してもらった。1.と 2.の問い 10 項目は、「1：まったくそう思わない」、「2：あまりそう思わない」、「3：どちらとも思わない」、「4：ある程度そう思う」、「5：非常にそう思う」の 5 段階で評価した。加えて、10 項目の回答理由に対する自由記載、教員からのハラスメントなどに関する事項や、改善・要望・意見についての自由記載の項目を設けた。

実習の授業評価は、計 10 項目と 2 項の自由記載で構成されていた。1. 実習については、実習の方法や内容、課題、評価について問う 5 項目、2.実習に対する自身の取り組みについては、目的目標を理解し、主体的に学習に取り組めたか、グループメンバーの一員としての行動等について問う 5 項目で構成した。3.実習を経て向上した・影響を受けたディプロマポリシー（DP）を回答してもらった。1.と 2.の問い 10 項目は、「1：まったくそう思わない」、「2：あまりそう思わない」、「3：どちらとも思わない」、「4：ある程度そう思う」、「5：非常にそう思う」の 5 段階で評価した。加えて、10 項目の回答理由に対する自由記載、教員からのハラスメントなどに関する事項や、改善・要望・意見についての自由記載の項目を設けた。

I. 授業評価実施状況

教育ソフトウェアのシステムを使用した授業評価は、5 月 7 日から 7 月 31 日を回答期間として実施した。教員へは授業評価回答率を上げるために講義内で授業評価時間を確保するよう依頼した。授業評価回答率を向上させるため、また、クラス委員から学年毎に働きかけ、委員から学年メーリングで授業評価 URL を配信し回答を促した。業者からは、学生個人の回答率が 100%に満たない学生をピックアップし、7 月 22 日、7 月 30 日にリマインドメールが発信された。

その結果、50 科目の授業評価の回答率は全体で **51.6% (2024 年度 60.4%)** だった。回答率 30%未満は 11 科目（クリティカルケア論、老年看護方法論Ⅱ、社会福祉学、免疫学、看護管理論、成人看護学実習Ⅱ、リハビリテーションケア論、微生物学、精神看護方法論Ⅱ、薬理学、災害・健康危機活動論）であった。20%未満はなかった。

学年別の回答率の内訳は、1 年生 16 科目で 74.1%（前年度 71.5%）、2 年生 17 科目で 41.3%（前年度 46.5%）、3 年生 13 科目で 40.8%（前年度 50%）、4 年生 4 科目で 36.2%（前年度 70.2%）で学年があがるごとに回答率が少ない結果となった。

科目区分別の回答率では、教養教育科目 20 科目で 59.4%（前年度 59%）、看護専門科目 30 科目 47.3%（前年度 60.3%）だった。

II. 評価結果

A. 全体（3 つの大項目）＊平均値の標記=MEAN±SD で表した。

1. 講義・演習

全 10 項目の平均値は 4.58 ± 0.04 だった（2024 年度 4.53 ± 0.67 ）。平均値の中で最も低い項目は、「教員は学生の理解を確認しながら授業を進めていた」が、 4.52 ± 0.70 であった。

科目を受講し向上した・影響を受けたディプロマポリシー (DP) での回答数(回答率)は、DP 1 主体的能力 1045 件 (76.5%)、DP 2 課題解決能力 868 件 (63.5%)、DP3 パートナーシップ 365 件 (25.8%)、DP4 地域医療連携能力 229 件 (17.5%)、DP5 倫理的姿勢 414 件 (31.7%)、DP 6 教養に裏付けられた品格を備えた態度 254 件 (19.4%)、DP7 メンバーシップ・リーダーシップ 270 件 (18.7%)、DP 8 国際的視野 39 件 (2.9%) であった。

2. 実習

前期の実習は 4 年生の 2 科目の全 10 項目の平均値は 4.50 ± 0.09 だった。最も平均点が高い順に、「臨地スタッフのチームや実習グループの一員として行動することができた」 4.64 ± 0.48 、「興味・関心をもって主体的に実習を進めた」 4.62 ± 0.49 、「新しい知識や思考・判断を得ることができた」 4.60 ± 0.49 の自身の取り組みの項目であった。最も低い項目は、「評価方法・評価基準は明確だった」 4.40 ± 0.53 「シラバス・実習要項に沿って実習が進められた」 4.40 ± 0.57 であった。

実習を経て向上した・影響を受けたディプロマポリシー (DP) での回答数(回答率)は、DP 1 主体的能力 45 件 (95.7%)、DP 2 課題解決能力 38 件 (80.9%)、DP3 パートナーシップ 28 件 (59.6%)、DP4 地域医療連携能力 28 件 (59.6%)、DP5 倫理的姿勢 31 件 (66.0%)、DP 6 教養に裏付けられた品格を備えた態度 24 件 (51.1%)、DP7 メンバーシップ・リーダーシップ 26 件 (55.3%)、DP 8 国際的視野 1 件 (2.1%) だった。

B. 学年別の大項目、小項目の平均値 (表 1, 図 1)

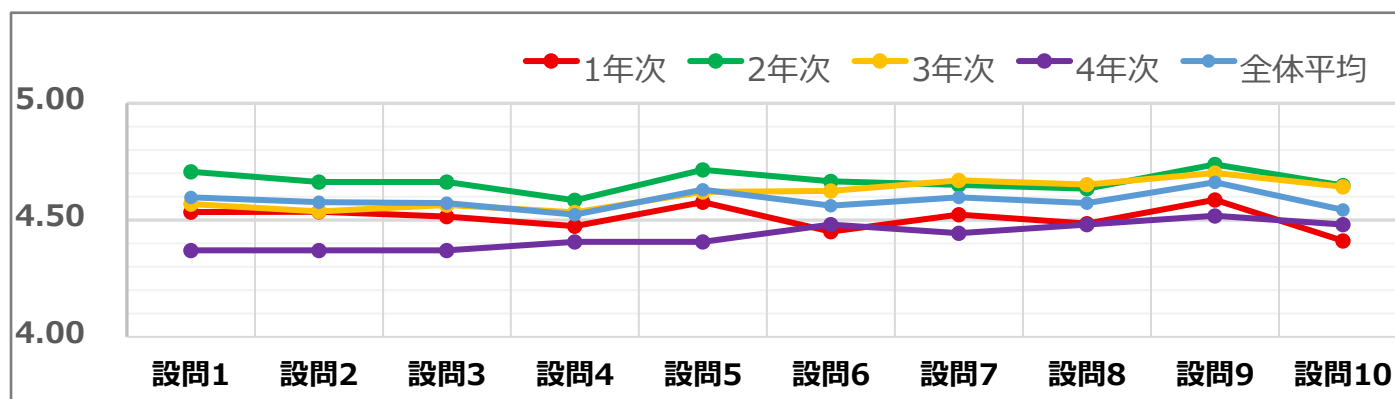
1. 講義・演習

学年別の大項目では、授業評価 10 項目の平均値で、I 授業について、II 自身の取り組みについて、全体平均値より高い傾向にあったのは 2 年生と 3 年生だった。小項目では、1 年生 2 年生 4 年生は 10 項目すべてで 4.5 前後の回答で、著しく高低値となる項目はなかった。4 年生は、全体平均値より低かったが、10 項目すべてで 4.3 以上の値だった。全体では、項目 4. 学生の理解度を確認しながらの授業進行に関する設問が 4.52 と低かった。

表 1 講義・演習科目 学年別大項目小項目の平均値

項目 学年 科目数		1. 授業について					2. 自身の取り組みについて				
		設問 1	設問 2	設問 3	設問 4	設問 5	設問 6	設問 7	設問 8	設問 9	設問 10
		授業の内容や教員の説明、教科書、資料 (参考文献、視聴覚教材他)、ICT の活用は適切だった	授業で提示された課題は適切だった	授業で提示された評価方法・評価基準は適切だった	教員は学生の理解を確認しながら授業を進めていた	教員は、シラバスに沿った授業を進めていた	私は、到達目標や授業方法・評価方法・学習上の注意を理解して参加できた	私は、科目の目的目標を達成するために、興味・関心をもって講義に参加できた	私は、科目における修学上の課題について、主体的、効果的に学修し、解決できた	私は、科目を通して、新しい知識や思考・判断を得ることができた	私は、科目を受講して、学修目的と目標 (ディプロマポリシーを含む) を達成することができた
1 年次	16 科目	4.53	4.54	4.51	4.47	4.58	4.45	4.52	4.49	4.59	4.41
2 年次	17 科目	4.71	4.66	4.66	4.58	4.72	4.67	4.65	4.63	4.74	4.65
3 年次	13 科目	4.57	4.54	4.56	4.53	4.62	4.62	4.67	4.65	4.70	4.64
4 年次	2 科目	4.37	4.37	4.37	4.41	4.41	4.48	4.44	4.48	4.52	4.48
全体	48 科目	4.60	4.58	4.57	4.52	4.63	4.56	4.60	4.57	4.66	4.54

図 1 講義・演習科目の学年別大項目小項目の平均値



2.実習
4 年次の実習 2 科目だけのため、比較はできない。

C. 科目区分別大項目平均値（表 2、図 2）

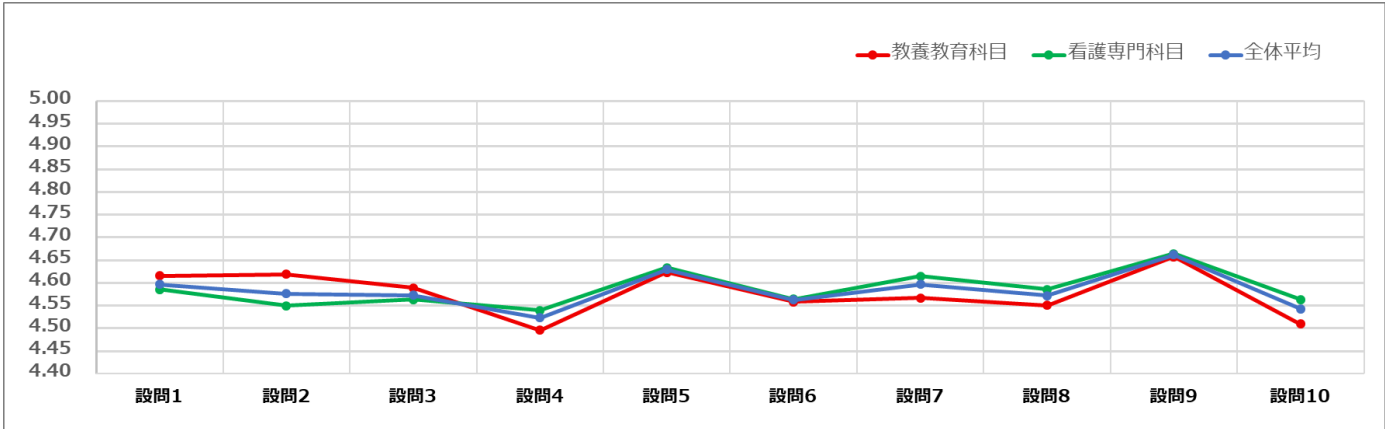
1.講義・演習

教養教育科目と看護専門科目の大項目では、授業評価 10 項目の平均、I 授業については、設問 4「教員は学生の理解を確認しながら授業を進めていた」以外で教養教育科目の方が高い傾向にあったが、II 自身の取り組みについては、看護専門科目の方が高い傾向にあった。小項目では、10 項目すべてで 4.5 以上だった。

表 2 講義・演習 科目区分別大項目小項目の平均値

項目 科目分類 科目数		I. 授業について					2. 自身の取り組みについて				
		設問 1	設問 2	設問 3	設問 4	設問 5	設問 6	設問 7	設問 8	設問 9	設問 10
		授業の内容や教員の説明、教科書、資料（参考文献、視聴覚教材他）、ICTの活用は適切だった	授業で提示された課題は適切だった	授業で提示された評価方法・評価基準は適切だった	教員は学生の理解を確認しながら授業を進めていた	教員は、シラバスに沿った授業を進めていた	私は、到達目標や授業方法・評価方法・学習上の注意を理解して参加できた	私は、科目の目的目標を達成するために、興味・関心をもって講義に参加できた	私は、科目における修学上の課題について、主体的、効果的に学修し、解決できた	私は、科目を通して、新しい知識や思考・判断を得ることができた	私は、科目を受講して、学修目的と目標（ディプロマポリシーを含む）を達成することができた
教養教育科目	20科目	4.62	4.62	4.59	4.50	4.62	4.56	4.57	4.55	4.66	4.51
看護専門科目	28科目	4.59	4.55	4.56	4.54	4.63	4.56	4.62	4.59	4.66	4.56
全体	48科目	4.60	4.58	4.57	4.52	4.63	4.56	4.60	4.57	4.66	4.54

図 2 講義・演習 科目区分別小項目平均



2.実習
実習 2 科目は看護専門科目のため、比較はできない。

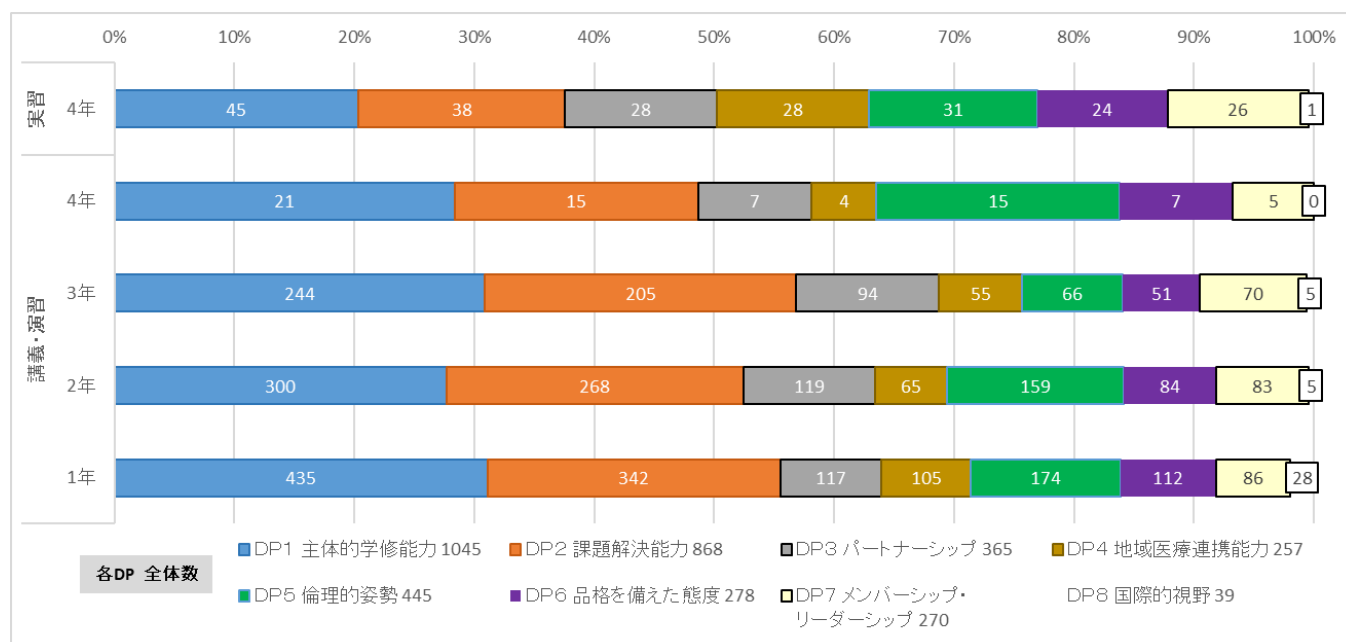
D. 科目を受講し向上した・影響を受けた DP（ディプロマポリシー）について（表 3、図 3）

科目シラバスの目的および目標に掲載された、科目ごとに設定された涵養 DP を踏まえ、講義・演習、実習で、8 つの学修成果の目標に関連した能力を身につけられたと感じたかについては、学生は複数回答をしているため、回答総数に対する実数の比率を算出し、講義・演習科目の学年別、と実習の比較をした。その結果は図 3 と表 3 に示した。講義・演習科目では、各学年に共通するのは、涵養されたと回答する DP 1, 2 の割合が大きい傾向にあった。4 年生では、他の学年に比べ DP5 と DP 6 の比率が大きい傾向があった。実習では、DP 8 以外の DP 1-7 が均等の傾向があった。

表3 講義・演習科の受講、ならびに実習を経て向上した（影響を受けた）DP（複数回答）

	全体	講義・演習				実習
		1年	2年	3年	4年	4年
DP1 主体的学修能力	1045	435	300	244	21	45
DP2 課題解決能力	868	342	268	205	15	38
DP3 パートナースhip	365	117	119	94	7	28
DP4 地域医療連携能力	257	105	65	55	4	28
DP5 倫理的姿勢	445	174	159	66	15	31
DP6 品格を備えた態度	278	112	84	51	7	24
DP7 メンバーシップ・リーダーシップ	270	86	83	70	5	26
DP8 国際的視野	39	28	5	5	0	1
回答総数(件)	3567	1399	1083	790	74	221
回答者数(名)	1354	552	443	285	27	47
1名あたりの回答数(件)	2.63	2.53	2.44	2.77	2.74	4.70
科目数	50	16	17	13	2	2

図3 講義・演習科目の受講、ならびに実習を経て向上した（影響を受けた）DP の比率（複数回答）



E. 教員による講評と授業改善計画

授業評価を実施した 50 科目のうち 48 科目の科目責任者からの講評と改善計画に関する回答を得ることができた（回答率 96.0%）。科目責任者へは、9 月中に授業評価結果の閲覧方法と入力依頼を行い、入力の回答期日を 10 月 10 日とした。この時点で 44 科目の回答であった（回収率 88.0%）であったため、回答期日を 10 月 15 日まで延長し回答率の増加につながった。

考察

学生からの授業評価回答率は 51.6%と前年度の前期の回答率に比べて低値となった。回答率 30%未満の科目が 11 科目であり、そのうち看護専門科目が 7 科目に該当していたことから、科目責任者に学生が授業評価を実施できるように、授業内で実施できるような工夫を依頼していく必要があると考える。学年毎では、再三の回答依頼にもかかわらず、2 年生と 3 年生、ならびに 4 年生の回答平均値が例年と同様に低かった。要因は選択科目で受講者が少ない科目や、演習科目で授業評価回答時間を確保できなかった可能性がある。次年度以降の傾向も注視していく必要がある。また、学生に主体的に授業評価をすることの重要性について、クラス担任や学生カリキュラム委員などを通じて、後期に向けて、各学年に検討してもらうこととなった。

科目別の自由記載からは学生の主観で感じたこと考えたことが記載されていたが、一部の科目ではハラスメントにつながる事象もあった。学生から指摘のあった教員の態度や言動については、それぞれの科目において改善が必要と思われる。

科目責任者からの講評・改善計画は、50 科目中 48 科目（96.0%）の回答があった。学生の授業評価の結果を振り返り、次年度に向けての改善計画が作成されていた。学生からは、この講評・改善計画の周知についての認識がないとの意見もあることから、学生にわかりやすく周知をしていく必要があると考える。

授業評価は、より良い授業と教育環境の実現を目指し、全科目で学生による授業評価を実施している。科目責任者および担当教員へは、看護学教育における自己点検・評価の PDCA サイクルに必要な資料として位置づけられている。授業評価システムの運用については、学事課と協働し回収率の向上をめざし、教員からの講評改善計画のスムーズな回収に努めることができた。

III. 総括

2025 年度前期科目の授業評価から、実習科目についても授業評価システムが導入された。授業評価回答率の向上に向けては、システムの導入以外にも、科目担当教員による授業時間内での回答時間確保に加え、学事課委員からの周知、学年のクラス委員への FDSD 委員からの回答促進、業者からのシステムメールでのリマインドを行ったが、60%以上の回答率には至らなかった。

後期に向けて、上記の実施を継続するとともに、さらに FD・SD 委員会からの学生カリキュラム委員を通じて、各学年の学生に授業評価に参画することの意義や回答率を高めるための工夫を学生と共に検討する。また科目責任者からの授業評価結果に対する講評と改善計画の周知が不十分であるとの意見もあることから、周知方法として、学生に伝わるチラシなどを作成し、e-ラーニング上の分かりやすい場所に掲示し、周知をはかることを検討していく。

I. 授業評価実施状況

1. 授業評価の実施

教育ソフトウェア社のシステムを利用した学生による後期の授業評価を 2025 年 9 月 10 日～2026 年 2 月 28 日までに実施した。一科目は、2026 年 3 月 13 日まで公開し授業評価を実施した。後期授業評価科目は、通年ならびに後期の講義・演習科目 54 科目（教養教育科目 18 科目、看護専門科目 36 科目）、実習科目が 12 科目の合計 66 科目、未実施科目が 1 科目であった。

教員へは授業評価回答率を上げるために講義内で授業評価時間を確保するよう依頼した。授業評価回答率を向上させるため、また、クラス委員やカリキュラム委員から学年毎に働きかけ、各委員から学年メーリングで授業評価 URL を配信し回答を促した。業者から、学生個人の回答率が 100%に満たない学生をピックアップし、2026 年 1 月 30 日、2 月 26 日にリマインドメールを発信してもらった。

2. 授業評価項目

講義・演習の授業評価項目は、計 10 項目と 2 項の自由記載で構成されていた。1.授業については、講義の方法や内容について問う 5 項目、2.授業に対する自身の取り組みについては、科目の目的目標を理解し、主体的に学習に取り組めたかについて問う 5 項目で構成した。3.科目を受講し向上した・影響を受けたディプロマポリシー（DP）を回答してもらった。1.と 2.の問い 10 項目は、「1：まったくそう思わない」、「2：あまりそう思わない」、「3：どちらとも思わない」、「4：ある程度そう思う」、「5：非常にそう思う」の 5 段階で評価した。加えて、10 項目の回答理由に対する自由記載、教員からのハラスメントなどに関する事項や、改善・要望・意見についての自由記載の項目を設けた。

実習の授業評価は、計 10 項目と 2 項の自由記載で構成されていた。1. 実習については、実習の方法や内容、課題、評価について問う 5 項目、2.実習に対する自身の取り組みについては、目的目標を理解し、主体的に学習に取り組めたか、グループメンバーの一員としての行動等について問う 5 項目で構成した。3.実習を経て向上した・影響を受けたディプロマポリシー（DP）を回答してもらった。1.と 2.の問い 10 項目は、「1：まったくそう思わない」、「2：あまりそう思わない」、「3：どちらとも思わない」、「4：ある程度そう思う」、「5：非常にそう思う」の 5 段階で評価した。加えて、10 項目の回答理由に対する自由記載、教員からのハラスメントなどに関する事項や、改善・要望・意見についての自由記載の項目を設けた。

II. 授業評価の学生の回答率

授業評価の科目全体の回答率は 44.38%（前年度 60.4%）であった。講義・演習科目の回答率は 44.04%（前年度 60.4%）だった。実習科目は、45.97%（前年度はなし）であった。講義・演習科目の回答率 30%未満は 14 科目（25.92%）、20%未満の科目は 4 科目（7.40%）であった。

実習科目の回答率 30%未満は、2 科目（16.67%）であった。

科目区分別の回答率では、教養教育科目 18 科目で 47.47%（前年度 59%）、看護専門科目 48 科目 44.14%（前年度 60.3%）だった。

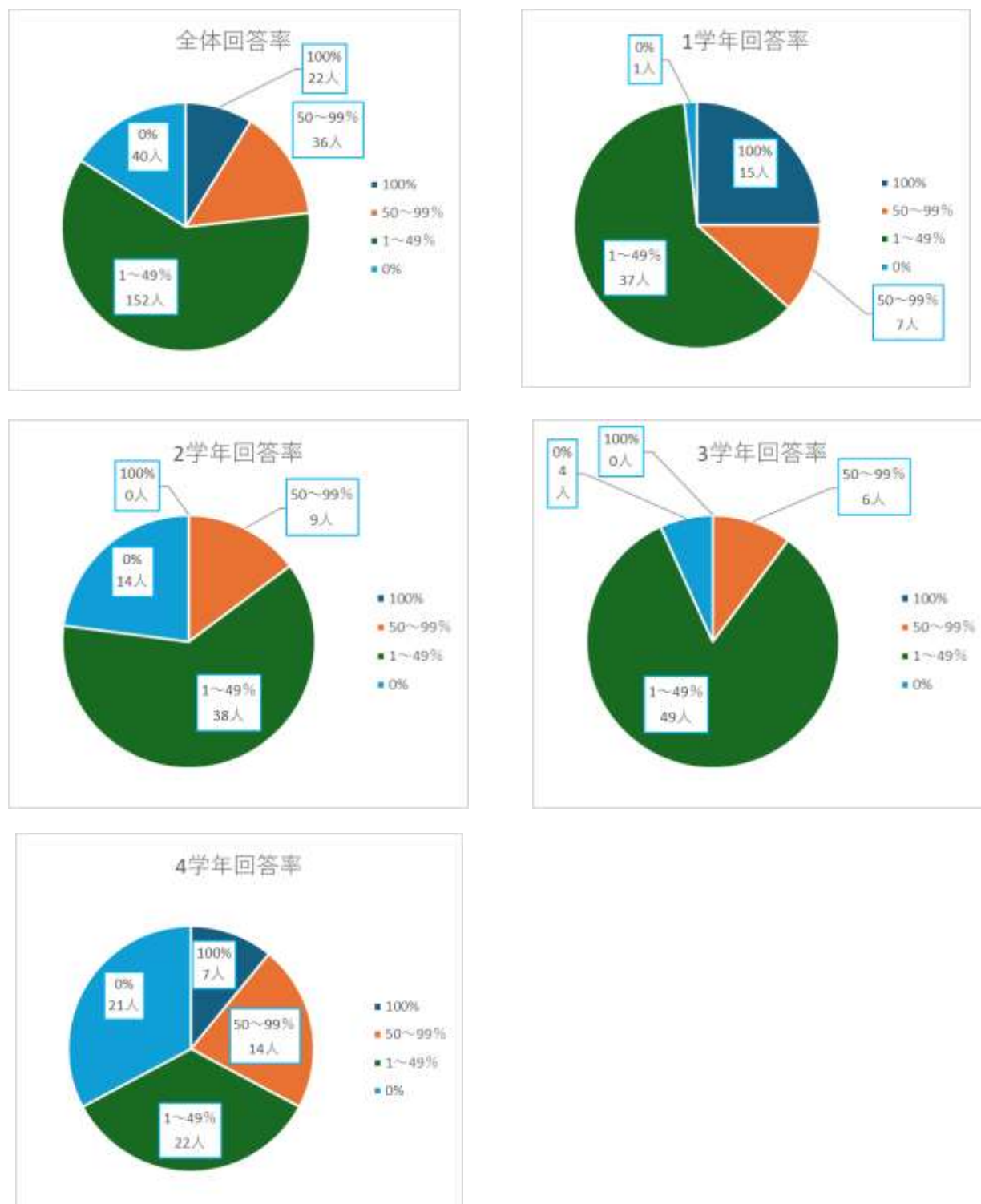
学年別科目の平均回答率の内訳は、1 年生が 44.74%（前年度 71.5%）、2 年生が 44.01%（前年度 46.5%）、3 年生が 43.33%（前年度 50%）、4 年生が 43.30%（前年度 70.2%）であった。

学生個人の平均回答率の内訳は、全体では 31.29%であった。内訳は 1 年生が 49.34%、2 年生が 23.09%、3 年生が 20.83%、4 年生が 31.86%であり、1 年生が最も回答率が高かった。回答 0%の学生が、1 年生 1 名（1.67%）、2 年生 14 名（22.95%）、3 年生 4 名（6.78%）、4 年生 21 名（32.81%）であった。

表1 全学生ならびに各学年の回答率

全体回答率			1学年回答率		2学年回答率		3学年回答率		4学年回答率	
回答率	回答者数	割合	回答者数	割合	回答者数	割合	回答者数	割合	回答者数	割合
100%	22	8.80%	15	25.00%	0	0.00%	0	0.00%	7	10.94%
50～99%	36	14.40%	7	11.67%	9	14.75%	6	10.17%	14	21.88%
1～49%	152	60.80%	37	61.67%	38	62.30%	49	83.05%	22	34.38%
0%	40	16.00%	1	1.67%	14	22.95%	4	6.78%	21	32.81%
ALL	250	100.00%	60	100.00%	61	100.00%	59	100.00%	64	100.00%

図1 全学生ならびに各学年の回答率



Ⅲ.評価結果

A. 全体（3つの大項目）＊平均値の標記=MEAN±SD で表した。

1.講義・演習

全 10 項目の平均値は 4.51 ± 0.59 だった。平均値の中で最も高い項目は、「教員は、シラバスに沿った授業を進めていた」 4.57 ± 0.54 、最も低い項目は、「私は、科目を受講して、学修目的と目標（ディプロマポリシーを含む）を達成することができた」 4.47 ± 0.58 であった。

科目を受講し向上した・影響を受けたディプロマポリシー（DP）での回答数、回答率（前年度回答率）は、DP 1 主体的学修能力 868 件、77.5%（69.7%）、DP 2 課題解決能力 692 件、61.8%（63.9%）、DP3 パートナシップ 363 件、32.4%（32.5%）、DP4 地域医療連携能力 219 件、19.6%（22.6%）、DP5 倫理的姿勢 339 件、30.3%（34.3%）、DP 6 教養に裏付けられた品格を備えた態度 254 件、22.7%（23%）、DP7 メンバーシップ・リーダーシップ 267 件、23.8%（23.6%）、DP 8 国際的視野 115 件、10.3%（7.4%）であった。

2. 実習

後期の実習は 1 年生から 4 年生までの 12 科目の全 10 項目の平均値は 4.67 ± 0.63 だった。最も平均点が高い項目は、「私は、実習を通して、新しい知識や思考・判断を得ることができた」 4.75 ± 0.54 、最も低い項目は、「臨地実習指導者や教員の説明は、学生の理解の深度に沿って、適切だった」 4.57 ± 0.74 「臨地実習指導者（臨床教員含む）と教員による協働した学習環境で効果的に学ぶことができた」 4.57 ± 0.80 であった。

実習を経て向上した・影響を受けたディプロマポリシー（DP）での回答数（回答率）は、DP 1 主体的学修能力 263 件（86.5%）、DP 2 課題解決能力 229 件（75.3%）、DP3 パートナシップ 197 件（64.8%）、DP4 地域医療連携能力 125 件（41.1%）、DP5 倫理的姿勢 190 件（62.5%）、DP 6 教養に裏付けられた品格を備えた態度 155 件（51.0%）、DP7 メンバーシップ・リーダーシップ 160 件（52.6%）、DP 8 国際的視野 11 件（3.6%）だった。

B. 学年別の大項目、小項目の平均値（表 1、表 2、図 1、図 2）

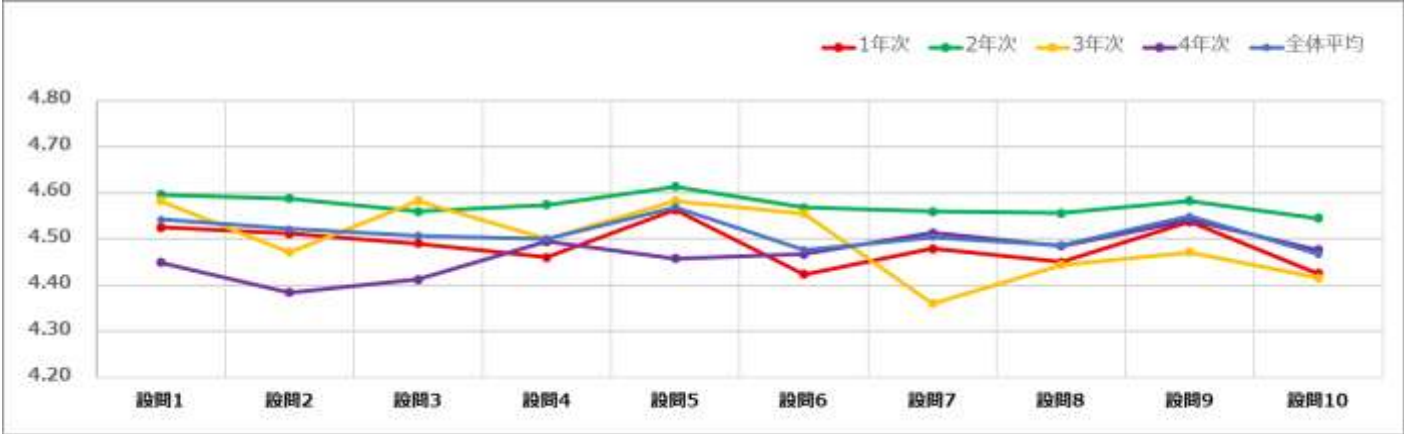
1.講義・演習

講義・演習において、学年別の大項目では、授業評価 10 項目の平均値で、I 授業について、II 自身の取り組みについて、全体平均値より高い傾向にあったのは 2 年生だった。小項目では、設問 7、8、9 において、3 年生の平均点は 4 学年で最も低かった。

表 2.講義・演習科目 学年別大項目小項目の平均値

項目 学年 科目数		1. 授業について					2. 自身の取り組みについて				
		設問 1	設問 2	設問 3	設問 4	設問 5	設問 6	設問 7	設問 8	設問 9	設問 10
		授業の内容や教員の説明、教科書、資料（参考文献、視聴覚教材他）、ICTの活用は適切だった	授業で提示された課題は適切だった	授業で提示された評価方法・評価基準は適切だった	教員は学生の理解を確認しながら授業を進めていた	教員は、シラバスに沿った授業を進めていた	私は、到達目標や授業方法・評価方法・学習上の注意を理解して参加できた	私は、科目の目的目標を達成するために、興味・関心をもって講義に参加できた	私は、科目における修学上の課題について、主体的、効果的に学修し、解決できた	私は、科目を通して、新しい知識や思考・判断を得ることができた	私は、科目を受講して、学修目的と目標（ディプロマポリシーを含む）を達成することができた
1 年次	20 科目	4.53	4.51	4.49	4.46	4.56	4.42	4.48	4.45	4.54	4.43
2 年次	20 科目	4.60	4.59	4.56	4.57	4.61	4.57	4.56	4.56	4.58	4.55
3 年次	2 科目	4.58	4.47	4.58	4.50	4.58	4.56	4.36	4.44	4.47	4.42
4 年次	12 科目	4.45	4.39	4.41	4.50	4.46	4.47	4.51	4.49	4.54	4.48
全体	54 科目	4.54	4.52	4.51	4.50	4.57	4.48	4.50	4.49	4.55	4.47

図2. 講義・演習科目の学年別大項目小項目の平均値



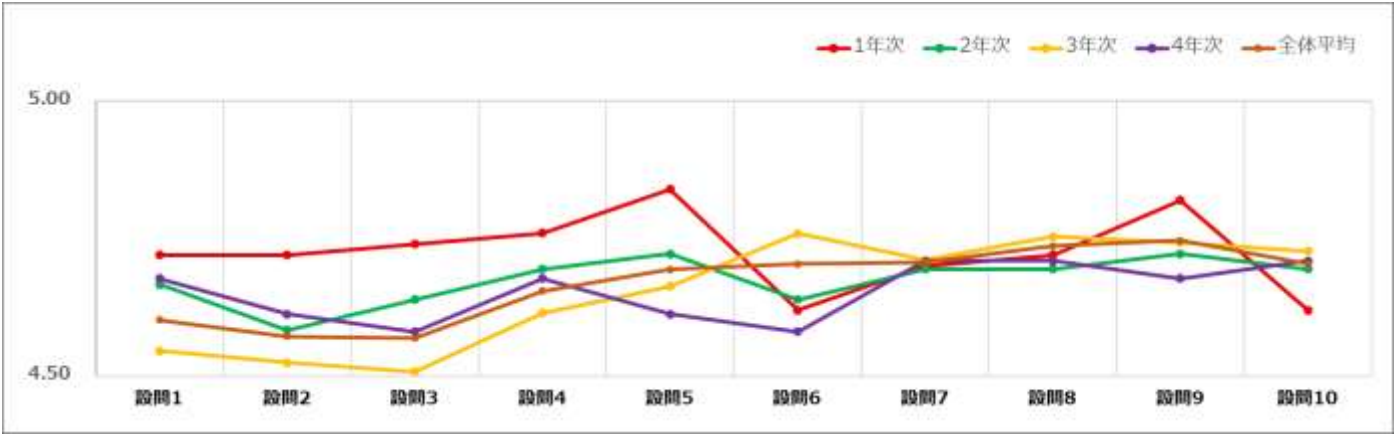
2.実習（表3、図3）

学年別の大項目では、授業評価 10 項目の平均値で、1. 実習の設問 1 から 5 について、高い傾向にあったのは 1 年生だった。2. 自身の取り組みについては、設問 6「到達目標や授業方法・評価方法・学習上の注意を理解して実習を進めた」は 3 年生が、設問 9「実習を通して、新しい知識や思考・判断を得ることができた」は 1 年生が高い傾向であった。

表3. 実習科目 学年別大項目小項目の平均値

		1. 実習について					2. 自身の取り組みについて				
		設問 1	設問 2	設問 3	設問 4	設問 5	設問 6	設問 7	設問 8	設問 9	設問 10
		実習資料（オリエンテーション資料、参考資料、実習記録など）、実習課題（量・内容）は適切だった	臨地実習指導者や教員の説明は、学生の理解の深度に沿って、適切だった	臨地実習指導者（臨床教員含む）と教員による協働した学習環境で効果的に学ぶことができた	実習で提示された評価方法・評価基準は明確だった	シラバス・実習要項に沿って実習が進められた（評価方法、明確な評価基準、実習内容など）	私は、到達目標や授業方法・評価方法・学習上の注意を理解して実習を進めた	私は、実習の目的目標を達成するために、興味・関心をもって主体的に実習を進めた	私は、臨地スタッフのチームや実習グループの一員として行動することができた	私は、実習を通して、新しい知識や思考・判断を得ることができた	私は、実習を通して、学修目的と目標（ディプロマポリシーを含む）を達成することができた
1年次	1科目	4.72	4.72	4.74	4.76	4.84	4.62	4.70	4.72	4.82	4.62
2年次	2科目	4.67	4.58	4.64	4.69	4.72	4.64	4.69	4.69	4.72	4.69
3年次	7科目	4.55	4.52	4.51	4.61	4.66	4.76	4.71	4.75	4.74	4.73
4年次	2科目	4.68	4.61	4.58	4.68	4.61	4.58	4.71	4.71	4.68	4.71
全体	12科目	4.60	4.57	4.57	4.65	4.69	4.70	4.71	4.74	4.75	4.70

図3. 実習科目の学年別大項目小項目の平均値



C. 科目区分別大項目平均値（表 4、図 4）

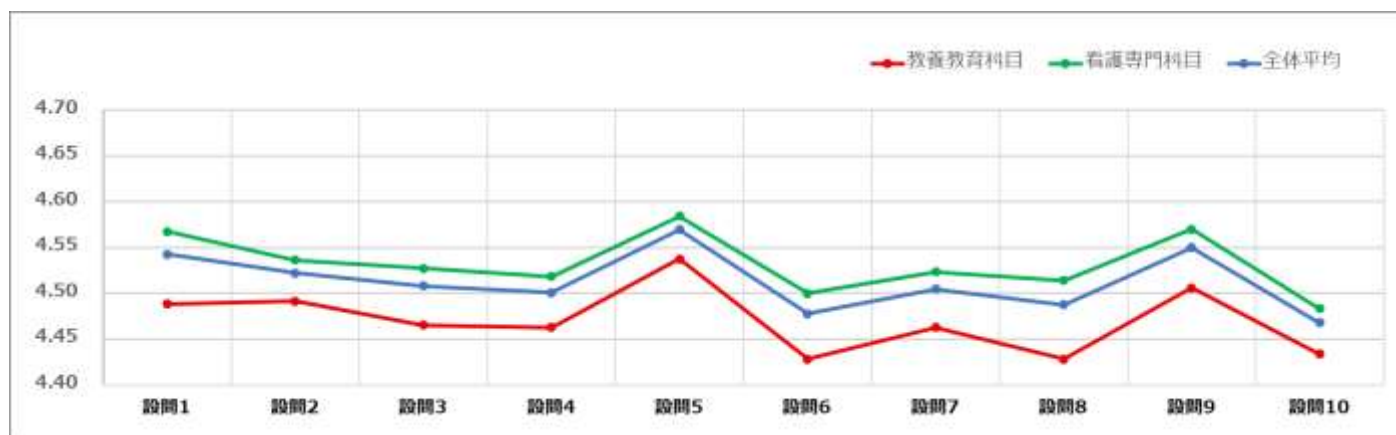
1. 講義・演習

講義・演習における教養教育科目と看護専門科目の大項目では、授業評価 10 項目の平均は、教養科目に対して看護専門科目の方が高かった。

表 4 講義・演習 科目区分別大項目小項目の平均値

		1. 授業について					2. 自身の取り組みについて				
		設問 1	設問 2	設問 3	設問 4	設問 5	設問 6	設問 7	設問 8	設問 9	設問 10
		授業の内容や教員の説明、教科書、資料（参考文献、視聴覚教材他）、ICTの活用は適切だった	授業で提示された課題は適切だった	授業で提示された評価方法・評価基準は適切だった	教員は学生の理解を確認しながら授業を進めていた	教員は、シラバスに沿った授業を進めていた	私は、到達目標や授業方法・評価方法・学習上の注意を理解して参加できた	私は、科目の目的目標を達成するために、興味・関心をもって講義に参加できた	私は、科目における修学上の課題について、主体的、効果的に学修し、解決できた	私は、科目を通して、新しい知識や思考・判断を得ることができた	私は、科目を受講して、学修目的と目標（ディプロマポリシーを含む）を達成することができた
教養教育科目	18科目	4.49	4.49	4.47	4.46	4.54	4.43	4.46	4.43	4.51	4.43
看護専門科目	36科目	4.57	4.54	4.53	4.52	4.58	4.50	4.52	4.51	4.57	4.48
全体	54科目	4.54	4.52	4.51	4.50	4.57	4.48	4.50	4.49	4.55	4.47

図 4 講義・演習 科目区分別小項目平均



2. 実習

実習科目は看護専門科目のため、科目区分別の比較はできない。

D. 科目を受講し向上した・影響を受けた DP（ディプロマポリシー）について（表 5、6、図 5、6）

科目シラバスの目的および目標に掲載された、科目ごとに設定された涵養 DP を踏まえ、講義・演習、実習で、8つの学修成果の目標に関連した能力を身につけられたと感じたかについては、学生は複数回答をしているため、回答総数に対する実数の比率を算出し、講義・演習科目と実習科目について、学年別に比較をした。

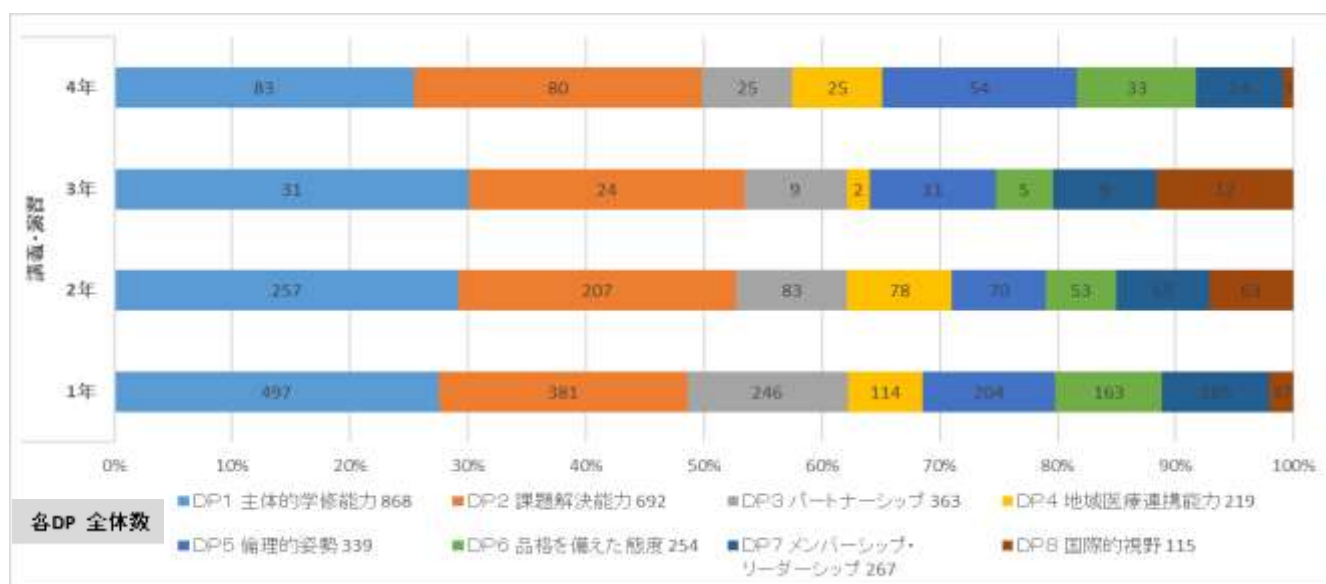
1. 講義・演習の受講を経て向上した（影響を受けた）DP（複数回答）（表 5、図 5）

講義・演習科目では、各学年に共通するのは、涵養されたと感じる DP 1、2 の割合が大きい傾向にあった。4 年生では、他の学年に比べ DP5 と DP 6 の比率が高い傾向があった。

表5 講義・演習の受講を経て向上した（影響を受けた）DP（複数回答）

		全体	講義・演習			
			1年	2年	3年	4年
DP 1	主体的学修能力	868	497	257	31	83
DP 2	課題解決能力	692	381	207	24	80
DP 3	パート ナーシップ	363	246	83	9	25
DP 4	地域医療連携能力	219	114	78	2	25
DP 5	倫理的姿勢	339	204	70	11	54
DP 6	品格を備えた態度	254	163	53	5	33
DP 7	メンバーシップ・リーダーシップ	267	165	69	9	24
DP 8	国際的視野	115	37	63	12	3
回答総数(件)		3117	1807	880	103	327
回答者数(名)		1120	625	350	36	109
1名あたりの回答数(件)		2.78	2.89	2.51	2.86	3.00
科目数		54	20	20	2	12

図5 講義・演習科目の受講を経て向上した（影響を受けた）DP の比率（複数回答）



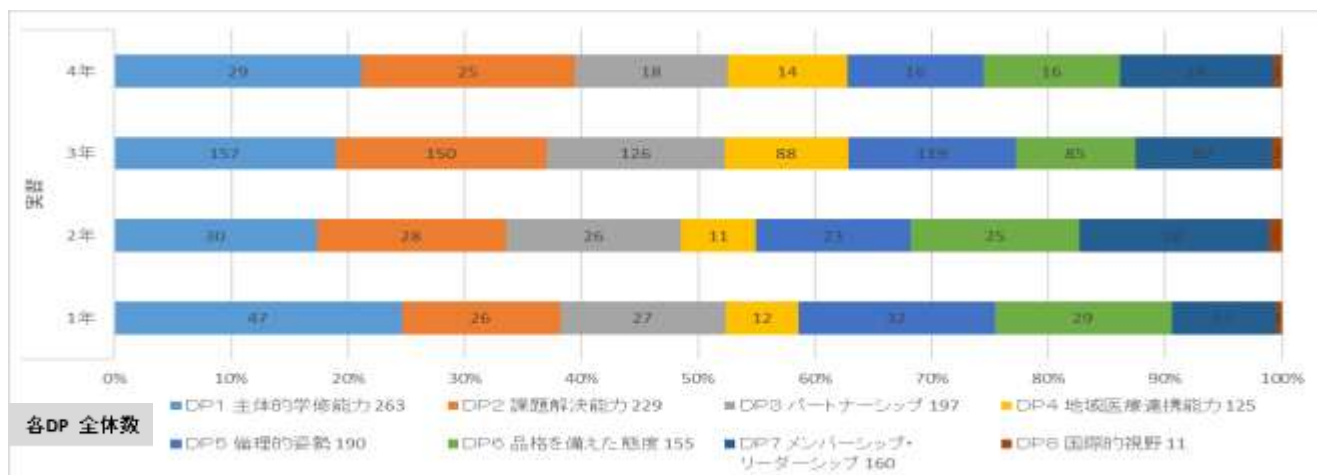
2. 実習を経て向上した（影響を受けた）DP（複数回答）（表6、図6）

実習科目の各学年に共通するのは、DP 4、DP 8以外の DP は、ほぼ均等の傾向があった。DP 4 は3、4年に比較して1、2年の比率が低かった。DP 8 は最も低かった。

表6. 実習を経て向上した（影響を受けた）DP（複数回答）

		全体	実習			
			1年	2年	3年	4年
DP 1	主体的学修能力	263	47	30	157	29
DP 2	課題解決能力	229	26	28	150	25
DP 3	パート ナーシップ	197	27	26	126	18
DP 4	地域医療連携能力	125	12	11	88	14
DP 5	倫理的姿勢	190	32	23	119	16
DP 6	品格を備えた態度	155	29	25	85	16
DP 7	メンバーシップ・リーダーシップ	160	17	28	97	18
DP 8	国際的視野	11	1	2	7	1
回答総数(件)		1330	191	173	829	137
回答者数(名)		304	50	36	187	31
1名あたりの回答数(件)		4.38	3.82	4.81	4.43	4.42
科目数		12	1	2	7	2

図6 実習を経て向上した（影響を受けた）DP の比率（複数回答）



E. 授業評価の学生からの自由記載について

自由記載には、授業についての科目からの学びや感想などを中心の記載がほとんどであったが、一部の科目については、ハラスメントではないものの、不満や意見などの内容が、教員の個人名とともに、稚拙でかつ誹謗中傷のような表現での記載があった。

F. 教員による講評と授業改善計画

授業評価の結果に関する講評と改善計画に関する入力期限を 2026 年 5 月 15 日とした。その結果、授業評価を実施・未実施を含む 67 科目のうち、53 科目（回答率 79.1%）であった。未入力の 14 科目について、5 月 31 日まで入力期限を延長し、最終的に 67 科目（100%）の回答であった。

III. 総括（考察含む）

2025 年度から授業評価に実習科目が加わった。授業評価の実習を含む科目全体における回答率は 44.38%と前年度の後期の回答率に比べて低値となった。回答率 30%未満の科目が、講義・演習科目で 14 科目、実習で 2 科目であったこと、未実施科目が 1 科目あったことから、FD・SD委員会として引き続き科目責任者に学生が授業評価を実施できるように、授業時間内で授業評価の時間を確保してもらうことを、科目責任者への周知を継続していく必要があると考える。

学生個々人の回答率においても 1-49%の比率が、学年別での結果でも共通な状況がみられた。0%の回答の学生も一定数いたことから、業者からのシステムメールでのリマインドを行い、学生に主体的に授業評価をすることの重要性について、クラス担任や学生カリキュラム委員などを通じて、10 月ごろに働きかけたが、その効果は十分ではなかった。2026 年度のオリエンテーション等で、全学年の学生へ、個々人が授業評価に参加する意義・役割についての周知を図り、各講義室に授業評価の回答を推奨するポスターを掲示した。

講義・演習科目の全 10 項目の平均値は 4.51 だったことからおおむね良い結果と考える。学年別の大項目では、授業評価 10 項目の平均値で、I 授業についてと II 自身の取り組みが、全体平均値より高い傾向にあったのは 2 年生だった。小項目では、設問 7. 8. 9 において、3 年生の平均点は 4 学年で最も低い傾向となった。講義・演習における教養教育科目と看護専門科目の大項目では、授業評価 10 項目の平均は、教養科目に対して看護専門科目の方が高かった。科目を受講し向上した・影響を受けたディプロマポリシー（DP）での回答数(回答率)は、DP1 主体的能力や、DP2 課題解決能力多い順であり、前年度と比較し横ばいを維持していた。DP8 国際的視野も前年度に比べ増加していた。講義・演習科目では、各学年に共通するのは、涵養されたと回答する DP1, 2 の割合が大きい傾向にあった。4 年生では、他の学年に比べ DP5 と DP6 の比率が高い傾向があった。

実習科目の全 10 項目の平均値は 4.67 であり、最も低い項目でも 4.57 であったことから、おおむね良い結果と考える。学年別の大項目では、授業評価 10 項目の平均値で、1. 実習の設問 1 から 5 について、高い傾向にあったのは 1 年生だった。2. 自身の取り組みについては、設問 6 「到達目標や授業方法・評価方法・学習上の注

意を理解して実習を進めた」は3年生が、設問9「実習を通して、新しい知識や思考・判断を得ることができた」は1年生が高い傾向であった。

実習を経て向上した・影響を受けたディプロマポリシー（DP）は、DP1主体的能力、DP2課題解決能力、DP3パートナーシップ、DP5倫理的姿勢の順であり、DP8国際的視野は少なかった。次年度以降に注視していく。各学年別の実習科目のDPでは、各学年に共通するのは、DP4、DP8以外のDPは、ほぼ均等の傾向があった。DP4は3、4年に比較して1、2年の比率が低かった。DP8は最も低かった。

科目別の自由記載からは一部の科目で教員への誹謗中傷に該当するような記載があったことから、授業評価の際のQRコードが記載されているパワーポイントの説明に、責任のある言動を促す記載を追記した。

科目責任者からの講評・改善計画は、67科目中67科目（100%）の回答があった。学生の授業評価の結果を振り返り、次年度に向けての改善計画が作成されていた。

学生からは、この講評・改善計画の周知についての認識がないとの意見もあることから、教員向けに、各授業・講義、実習の際のオリエンテーション時に、前年度の授業評価の講評と結果を学生にわかりやすく説明することも依頼している。今後はさらに、授業の初回時に前年度の授業評価についての改善点等を学生に伝えていただく際に活用できる所定のテンプレートを作成し、科目責任者に周知していくこととした。

授業評価は、2025年度前期科目の授業評価から、実習科目についても授業評価システムが導入され、看護学教育における自己点検・評価のPDCAサイクルに必要な資料として位置づけられている。学生が自由記載で回答した内容等、これまではなかった課題が生じていることから、現在、授業評価の結果をe-ラーニング上の分かりやすい場所に掲示しているが、今後は、授業評価の公開の在り方を含む全体の授業評価の運用システムについて、関係委員会、学事課と協働していく。また、学事課の業務負担を含む改善を図ることをめざす。